

原因不明で経過する発熱， 不明熱患者のみかた

原因がわからない発熱を主訴に内科の外来を受診する患者は多数います。そのほとんどは一過性のかぜ症候群などであり，必ずしも確定診断とならずとも医師，患者双方とも想定した範囲内で病状が軽快，治癒し，問題となることはありません。しかしながら，時として，発熱が遷延し，当初の経験的治療にも反応せず，診断に難渋するケースに遭遇することもあります。定義として不明熱にあてはまるものに限らず，また，入院精査を行うような状況でもない，こうした発熱患者の診療をどのように進めるかは外来診療を行う担当医の頭を悩ませる大きなテーマです。いろいろなところで不明熱や発熱患者の診療については議論されていますが，医療・医学の進歩に合わせてアップデートしていくことは重要と考えています。

本特集では，初診時に原因が明らかではない発熱，不明熱の患者を診療する際に，診断までのプロセスで，どのようなことをあらかじめ意識しておくことが必要で，可能性のある個々の疾患の診断にどのようにアプローチするのが望

ましいかを整理することを目指しました。総論では発熱患者を外来で目の前にして考慮すべき最初のポイントをいくつかの観点から，それぞれの領域の専門の先生方に執筆していただきました。各論では，発熱をきたし得る代表的疾患領域として，感染症，自己炎症性疾患，自己免疫疾患，悪性新生物をピックアップしました。また，それぞれの領域のまとめと，今回のテーマにあてはまるいくつかの疾患についてそれぞれの執筆者の先生に解説していただきました。最後のセクションには，長く続く発熱患者を診療する際に気をつけたい，必ずしも鑑別の上位には上がらない疾患・病態についてもまとめていただいています。

診断がわかっていれば，症状の1つとして遷延する発熱は何ら違和感のないものでも，発熱を出発点として，最終的な診断にたどり着く難しさは読者諸先生方もお感じになっていることと思います。本特集が先生方の日常診療に，そして，そのような症状で困っている患者のために，少しでもお役に立つことができれば幸いです。

東京大学保健・健康推進本部
柳元伸太郎